

William Wordsworth の memory

に関する一考察

添 田 透

I

William Wordsworth の作品の多くは memory と imagination による recollection と restoration を主題にしているといえよう。そこに描かれている世界は例えば子供達の心と経験そのものではなくて, “The Child is father of the Man” の内容を知っており, 知っているが故に過去の経験の中から, 過去と現在を混合する一つの vision をもたらすことのできる大人の詩人の想像力によって理想化された経験なのである。Wordsworth の mind について次のような詩行がある。

A tranquillizing spirit presses now
 On my corporeal frame: so wide appears
 The vacancy between me and those days,
 Which yet have such self-presence in my mind,
 That, sometimes, when I think of it, I seem
 Two consciousnesses, conscious of myself
 And of some other Being.¹⁾

1) E. de Selincourt, ed., Stephen Gill, cor., *The Prelude or Growth of a Poet's Mind* (Text of 1805) (Oxford University Press, 1970), II, 27-33. 以下 *The Prelude*, II, 27-33 と略す。

上記詩行は mind についての Wordsworth の考えを簡潔に述べているといえるが、詩人はここで自分の心の中に imagination によって肯定されている現在と少年時代についての二つの意識のあることを認めていることが理解できる。時の経過と個人性の変化を認めており、丁度 Kant のように時間をしっかりと心の中に位置づけてはいるが、彼の場合はあくまでも時間は彼の支配下にあり、主役とはなっていない。

Wordsworth は visual な sense-impression を通して得たものを memory の中に貯えたのだが、例えば “To a Highland Girl” の中で memory について次のように述べている。

In spots like these it is we prize
Our Memory, feel that she hath eyes:²⁾

Lomond 湖へ降りる途中の山道で Wordsworth が1803年に出会った少女は、いわば一種の女性美の典型であったともいわれているが、詩人のこの少女の美に対する感受性が尋常一様のものでないことを悟り得る。そのことは後年の彼の言葉からも明瞭である。彼は1843年 I. Fenwick に “...and now, approaching on the close of my 73rd year, I have a most vivid remembrance of her and the beautiful objects with which she was surrounded.”³⁾ といった。これは73歳の老翁が40年前に見た一少女の美しさを鮮明に記憶していたことを示すが、それはこの少女が Walter H. Pater のいう “impassioned contemplation”⁴⁾ の対象であり、Wordsworth も力説している “an impassion’d sight”⁵⁾ に他ならなかったからであろう。このように Wordsworth

2) “To a Highland Girl”, 66-67.

3) E. de Selincourt & H. Darbishire, ed., *The Poetical Works of William Wordsworth* (Oxford: At the Clarendon Press, 1946), III, p. 444. 以下 PWW, III, p. 444 と略す。

4) Walter Pater, *Appreciation* (Macmillan, 1910), p. 60.

5) Cf. *Preface to Lyrical Ballads*.

の memory の対象は歎び、永遠性、普遍性、崇高性を伴っていることが多い。同じく老獵犬係についての詩 *Simon Lee* についても詩人は I. Fenwick に “I have, after an interval of 45 years, the image of the old man as fresh before my eyes as if I had seen him yesterday.” と述べてその memory の力強さを示している。

Wordsworth はある光景を作詩の対象とする場合、その光景を memory の中で考え、今浮かび出たその光景と、それについての過去の経験とを比較し、ついには彼の脳裏にその光景についてのある image を焼き付け、やがてその image が詩の持つ鮮やかさを得るまでその内容を考えたのであった。その場合 sense impression のもたらす残像は心に残るが事実の残像は存在し得ないのである。

Wordsworth の memory の中で最も重要なものは visionary で mystical な経験ともいえる “spots of time”⁷⁾ である。これは詩人 Wordsworth を育てた大きな要素の一つである諸々の感情及び意識を生み出した神秘的経験であって、原経験に溯りある特定の日時や季節、事件を記されることから始まることが多い。memory の中の原経験が、脳裏に再現する場合は、imagination によって変容されているが、同時に “spots of time” となったそのような経験は imagination の栄養源ともなっているのである。このことについて James Scoggins は次のようにいっている。

...the poet carries from each incident one of those “spots of time”
that remain to feed the imagination when the fleeting moments of
vision have passed.⁸⁾

6) *PWW*, IV, pp. 412-13.

7) *The Prelude*, XI, 258.

8) James Scoggins, *Imagination & Fancy* (Lincoln : University of Nebraska Press, 1966), p. 117.

なお、以下の詩行は imagination による memory の内容の変容を如実に示している。

Of these and other kindred notices
 I cannot say what portion is in truth
 The naked recollection of that time,
 And what may rather have been call'd to life
 By after-meditation.⁹⁾

一般的には1799年以後、この Wordsworth の詩心の支えになっていた “spots of time” を彼が意識することは次第に希になり、汎神論的人生観に安住し得なくなっていくといわれているが、ただこれに対しては Edith C Batho のように Wordsworth の偉大な時期は1797から1815年迄続くという意見もある。

Wordsworth の memory には “tenacious” の形容語がつくほど強いものだが、彼の詩の理論と実践とに関係があることはすぐ理解できる。彼の場合 *Extempore Effusion upon the Death of James Hogg* (1835) のような秀れた即興的作品もあるが、他の即興詩は総行数151行にすぎず、即興的に書くというのは Wordsworth の方法ではなかった。J. C. Smith は Wordsworth が *Preface* にあるように対象を即座に詩にすることはせず（出来ず）、例えば、弟 John の難船の時のように、その悲しみを詩にすることを試みたにも拘わらず出来なかったのだとし詩人の次の言葉を引用している。

I began to give vent to my feelings in a poem ; but I was overflowed
 by my subject, and could not proceed. I composed much, but it is all
 lost except a few lines, as it came from me in such a torrent that I

9) *The Prelude*, III, 644-48.

was unable to remember it.

memory への沈潜がなされなかったものは詩にはならないことが伺える。

また Wordsworth は Walter Scott が鉛筆とノートを持って戸外に行き、自然の魅力の目録を作り、その目録を作品にしていると責めたことがある。Wordsworth は見たものを heart の中に入れておき、後に memory に質問すべきだというのだ。そうすれば accidental なものが消え去り、memory に残るものはその場面の ideal で essential な真実のみであるというのである。¹⁰⁾これはあの *Preface* の定義に従い実践した経験からの総括であろう。Wordsworth 自身は対象から受けた sense impression を一旦無意識のいわば深い井戸に沈ませ、ある時間の経過を経て memory に問いかけ、ある連想によって再び表面に浮かび上がらせるのである。そこには imagination による transformation が行なわれていることは当然である。

今 imagination と memory の関係を説くにあたって *Poems of the Imagination* の範疇に入っている “To the Cuckoo” と “Resolution and Independence” を対象にとりあげてみよう。Wordsworth はこの範疇に入る51の詩において全般的に生命の永遠なる要素を解説することと、誰にでも理解される言語を使うことに成功したといえようし、さらにはこの一連の詩のテーマは死と悲しみの変形を伴って一時的なるものと永遠なるものとの融合であることが理解される。

さて “To the Cuckoo” は1802年3月23日～26日に作られた詩であるが、同年3月26日には “My heart leaps up”, さらに数日遅れて執筆が開始され, “My heart leaps up” の一部を epigraph にした “Immortality Ode” (および *The Prelude* の第Ⅰと第Ⅱ巻) という作詩上の連続は、明らかに彼の幼年時代から青年時代にかけての自然に対する神秘的感覚の喪失についての彼の意識が、青年期から壮年期時代へと個人的同一性についての完全なる調和に対す

10) J. C. Smith, *A Study of Wordsworth* (London, Oliver & Boyd LTD, 1944), p. 17.

る信念よりも重きを置き始めたことを示しているといえよう。この作品を一口でいえば cuckoo を神秘の象徴としてしか把握できない大人となった今、cuckoo を神秘そのものと把握し得た子供時代を懐しむ詩、換言すれば詩が表わし得ない真実の世界を求めた作品の一つと考えることができる。肉体を伴わない cuckoo の声は現世的な時や場所の所属物とはならない。詩人が聴いている目に見えない鳥の声を、子供時代に聴いたのと同じものであるということを認めることは immortality の intimation である。子供の頃の経験が持つ意味は memory の中で回復できる。そして回復したものと共に子供時代の中に埋められていた power of wonder がやって来る。特に彼の場合、memory と imagination によりもたらされるものは何も失われていないといっても過言ではない。さらに詩に沿って述べてみれば、無意識の中に強く印象づけられた少年時代即 “golden time” に聞いた cuckoo の声が、32歳の Wordsworth の耳に響いた cuckoo の声を契機に甦えり、そこから神性の啓示とする少年時代即 “golden time” を再び生じることができ、その結果彼が歩む大地が非物質的な幻想の場となって再び現われるとするのである。そしてこのような “an unsubstantial, faery place”¹¹⁾こそ、cuckoo のような memory と imagination の世界の鳥が棲むのにふさわしい所 “fit home for Thee!”¹²⁾と断定するのである。primary imagination は混乱した種々の sensations を一つの unit に溶合し、poetic faculty である secondary imagination は memory に固定されていたオリジナルな経験を豊かにして、memory の一部となっていた経験を詩へと昇化させるのである。

次に “Resolution and Independence” を通して詩人の原体験と作品の関係、そしてそこにおける memory と imagination の役割についてさらに述べて行きたい。この作品は Wordsworth の詩の中心的テーマの一つである天国と人間界の対照と融合をよく表わしている人生詩である。そこには信仰と忍耐によって人は外的環境から免れうるという詩人の強い信念が見受けられ、家

11) “To the Cuckoo”, 31.

12) *Ibid.*, 32.

のない蛭とりは神の加護のもとで安全であり、地上的希望を持っているために不安である地上的詩人を辱める。

Wordsworth 達が蛭とりの老人と出会ったのは1800年9月26日だが、この詩は1802年5月3日に書き始められ、7月4日に完成している。J. C. Smith は Dorothy の日記にある現実の出来事と作品を比較しているが、事実多くの細かい内容は消されている一方で、この作品にとって典型的で基本的な真実である “extreme old age”, “sable orbs”, 非常な苦痛の圧迫による “body bent double”, Scotland 地方の “stately speech” は確かに保存されている。そして時間、場所、環境といった背景は完全に変えられていることに気付く。例えば Smith によれば、作品では老人と出会った1800年9月26日に Wordsworth は意気消沈の状態にあったと詩にはあるが、そのように想像する理由がなく、アヘンの習慣に悩む Coleridge との関係もあり、作詩中の1802年5月には dejected の状態であったとする。だとすれば Coleridge の失意の状態に影響されて帰宅した Wordsworth は、memory の中の元氣な自分を imagination を通して現実とオーバーラップさせ、逆境、不幸の中での firmness の象徴として、老いた蛭とりの姿を描いたのだと考えられる。Wordsworth は自己の visionary power というか imagination を刺激するような setting の中に、この老人を設定する迄は作詩が行なえなかったのである。memory の中に固定されていた経験が、imagination の不必要なものを取り除くという選択と transformation を経て、詩的真実として詩中の存在となるのである。

次に imagination の働きが強い作品の一つである “Stepping Westward” を見ていこう。この作品は動機的直接経験である “What, you are stepping westward?”¹⁴⁾ という挨拶が、Wordsworth にいかなる内面的経験を与えたかを、さらにはその一時的な挨拶が詩心を永遠へと広げていくその顕現の過程を述べたものである。

1803年9月11日にいわば直接経験として詩人の心の琴線に触れた挨拶が

13) J. C. Smith, pp. 18-20.

14) “Stepping Westward”, 1.

memoryの中から呼び戻されたときは、その環境を背景として Wordsworth の心の中で、悲観的表現から楽観的表現へといわば自己説得的な発展へと進んだ詩的情緒を呼び起こしたが、この情緒と輻湊するのがそのイメージを中心として、その2年後の1805年2月2日に起こった弟 John の死という悲しい事件によって人間的自我の世界を含むようになり、死のもたらす哲学的自我主義という思考原理の破壊のため、人間の中により大きな愛を認識するという心的展開である。そしてこの新しい内的世界を詩人は4ヵ月後の1805年6月3日に“Stepping Westward”という詩の世界の中で展開したのであった。ここにも“Resolution and Independence”に見受けられた天国と人間界の対照と融合という関係が、種々変化に富んだ含蓄のある底流を成していることに気付く。この詩の特質は、日常の挨拶が memory に貯えられるほど強く sense impression の対象となり、やがて imagination にゆだねられるに至った過程とその結果にある。

以上は短篇を中心に述べて来たが、次に *Lyrical Ballads* を代表する“Tintern Abbey”と *Poems, in Two Volumes* を代表する“Immortality Ode”における memory について少し述べてみたい。

“Tintern Abbey”における memory は、確立された imagination と相互作用しながら、過ぎていく瞬間についての印象と合体し、その印象を広げるのみならず、時間の継続の中に、過去と現在とを一種の不同の中の類似として融合する力といえよう。“The picture of the mind revives again¹⁵⁾”は正に上記の現在の中に過去を蘇生させるこの memory の力を述べているが、ここから“Tintern Abbey”における memory の機能は「再構成」の要素の強いものであることを知ることができる。換言すれば“Tintern Abbey”においては Wordsworth にとって眼前の風景に付随する過去の感情と、その風景に対して抱いていた過去の vision は、現在を認識するという行為の中で、全体の一部として、さらには生産する力として絶対必要なものとして mem-

15) “Tintern Abbey”, 61.

oryによって取り戻されているといえよう。一方“Immortality Ode”における“The things which I have seen I now can see no more.”¹⁶⁾という表現は、“Tintern Abbey”の立場からすれば、詩人と自然との関係が途切れたことを意味するともいえようし、一般的 memory から見れば、memory の失敗といおうか、過去との結びつきを回復する力を欠いている状態を示すものといえよう。となれば“Immortality Ode”での memory は“Tintern Abbey”の中で示した再構成の役割を果たしているとはいえず、詩人に喪失感を意識させる機能として役立つのみということになる。普通の memory は mortal な現世的過去についての知識を再構成できるが、“Immortality Ode”の場合は導入された前生説における誕生という永遠と有限との分離によって、memory は我々の前生の状態を明確に知覚できない。この場合は S.M. Sperry もいうように、¹⁷⁾“Tintern Abbey”の風景とか Dorothy の“wild eyes”の光の中に Wordsworth が発見したような過去を再構成できないし、むしろ決して復活されない過去の存在を暗示、公表するといおうか、ある意味では証明するために働くものとなる。ここに二つの過去についての二つの memory の存在という意識がでてくる。即ち“Tintern Abbey”に見られるような家庭的な養い母である自然と過ごした生活や経験であって、時間の中に埋まっているが、間隔を経て蘇生し、回復する現世的な過去、並びにそれについての memory と、“Immortality Ode”に見られるような永遠なるものに包含された一つの時であり、誕生の時に作られた永遠と現世の間の切れ目のために知覚できず、ただ死に向かう過程で我々から遠のくほんやりとしたものとして感じられる先験的な過去、並びにそれに関係する memory である。ただこの後者の memory は現在と、忘れられた過去との子供時代という中間的過去を把握しており、詩人はこの memory によって、かつては永遠の状態を呼び戻すことができたという経験を記憶しており、その経験を回想する

16) “Immortality Ode”, 9.

17) S.M. Sperry, “From *Tintern Abbey* to the *Intimations Ode*: Wordsworth and the Function of Memory,” *The Wordsworth Circle*, I, No. 2 (1970), p. 43.

ことができるのである。そしてその結果、memory は過去より生きる喜びを得て、精神的危機を回避する役割を果たすのである。人間の永遠の過去との結びつきの強い一種の想像的、通知即ち予告的色彩のある役割が強い memory といえよう。二つの詩において、Wordsworth は自然の栄光を失うか、その恐れを抱いたとき、彼は栄光に肖る初期の自我についての memory の働きによって慰められたことは事実である。ただそれは memory の中に把握された場面と、その場面についての詩人の新鮮な印象が合体したときに可能であるといえよう。¹⁸⁾

II

心理学では memory とは最も広い意味では学習と呼ばれる概念にほぼ近いが、狭い意味では、ある期間保持された過去の経験を、既知感情を伴って再現する過程、その内容、またはその機能をいう。論理的には第1にその経験が生体に記録されていなければ memory は起こらない。この経験の記録を記録といい、記録された経験が想起されるためには、生体の中になんらかの形でそれが貯蔵されていなければならず、それを記憶痕跡と呼ぶ。第2に記録された記憶痕跡は想起される時点まで存在している必要があり、これを保持という。第3に元の経験が必要に応じて想起され、再現されることによって、生体にとっての memory の適応的な意義が達成される。想起は必要な経験の呼び戻しであるので、これは検索とも呼ばれている。このように記録、保持、検索は memory の働く過程を構成する三つの時間的な様態であり、忘却は保持期間中の記憶痕跡の変化だけでなく、検索の失敗によっても起る、と説明されている。科学的心理学の範疇では解釈し難いのが Wordsworth の memory ではあるが、いま彼の態度に敢えて心理学用語を充当してみると、「過去に経験した事物を熟知感をもって認知する」という「再認」

18) 添田透「W. Wordsworth, *Immortality Ode* への一つの接近」『甲南女子大学英文学研究』, 23号 (1987), 参照。

という言葉がふさわしく、特に手掛かりが悪くてもそれを再現出来、その像は刺激が消去後わずかししか持続しない「残像」ではなく、「直観像」があてはまる。本来これは11歳～12歳頃迄の年少児に現われやすいが、素質によって強く左右され、希には成人後も非常に強い直観像が保持され、超人的記憶力と誤られることがあるといわれている。これを memory の種類から見れば、Henri Bergson の著名な類別によると、image から成る純粹記憶である表象的記憶に属するといえよう。またどのような種類の記憶心像が再生されやすいかという問題は個人差があるが、Wordsworth の場合は視覚型、聴覚型ともいわれる言語心像型という言語的記号としての image を思い浮かべることが出来るし、時には事物心像型という具体的な事物の image を思い浮かべることもある。Wordsworth の場合、追憶が行なわれるのであるが、通常この心的行動はほぼ1歳半～2歳頃迄溯ることが出来るといわれているものの、極く希であり、また非常に強い情緒的経験に限られるというのが科学的範疇における追憶なのだが、“Immortality Ode”における memory の特質とは関係があるようにも思われる。¹⁹⁾

一方 Christopher Salvesen²⁰⁾ は Wordsworth の memory の根本的機能として、i) 感覚による受容の力を再生し、補い、拡げる力であり、時間的連続についての殆んど肉体的感覚をもたらす力、ii) 詩的自我を絶えず構成したり、再構成する過程における中心的機能、iii) 現在の知覚の中で、生き生きとした本質的要素として、過去を再び経験したいという詩人の要求に答える中心的機能、という解釈を与えている。いずれの場合も、結局は過去のある時間の中から現在に影響を与える「何か」を体験するための機能であり、あらゆる疎外感からの避難のために使用される機能といえよう。さらには時間、予言能力の消失、衰退などに対する防備的機能であり、この思想が発展すれ

19) 梅本堯夫・大山正編著『心理学への招待：こころの科学を知る』（サイエンス社、1992）及び『国民百科辞典』（平凡社、1965）、2. 参照。

20) Christopher Salvesen, *The Landscape of Memory: A Study of Wordsworth's Poetry* (University of Nebraska Press, 1965), p. 167.

ば Harold Bloom のいう「時ならぬ死に対する防備」²¹⁾であるということになる。これ迄 memory と imagination の関係については触れて来たが、imagination の力が衰えるということは、過去のある時間の内側から、ある“godlike hours”²²⁾を選び出し、再集成し、過ぎ去った原体験を現在に蘇らせ、詩人の喪失感を償う充実した内的世界をもたらす力が衰えることを意味し、そうなれば memory の機能である過去を現在において再構成し充実させる力も低下することを意味する。

さて Wordsworth の memory の対象の殆んどのものは、結局は pleasurable なものであったという意見がある。確かに彼が詩人として幸福な人間であり、痛ましいものより楽しさをもたらすものを、そして詩の栄養となるものを memory の対象としたために、彼の memory は彼にとって幸福の変わらない源であり、喜びを高め、悲しい時の Wordsworth を元気づける genuine images に満たされたものであったという意見も、確かに彼の memory の資質の一端を示すものといえよう。

詩は見え隠れする対象に対する詩人の我の活動の結果、心に印された記憶心象とその再生という詩人の内面的経験を人々に経験させる芸術であるとするならば、memory は Wordsworth が詩人として生き続けるために欠くことのできない切実な機能であったことは確かであろう。

21) Harold Bloom, *Poetry and Repression* (Yale U.P., 1967), p. 80.

22) *The Prelude*, III, 192.